

ウガンダ海外実践教育プログラム

工学部社会システム土木系学科

澤根 正佳

目次

1. 参加の動機
2. ウガンダに行ってみて
3. プレゼンテーションについて
4. 最後に
5. 撮った中で印象に残った写真について

1. 参加の動機

はじめに、私がウガンダに行こうと思った動機は本当に軽い気持ちであった。大学生になって留学生と交流する機会があり、自分とは違った考え方を持っていることに興味がわき、海外に関心を持つようになった。また、アフリカは今後の人生において行くことができる機会はあまりなく、大学生の時にしか多くの時間を取ることができないと思い、また一度きりの人生たくさん事を自ら経験したいと思ったからだ。家族からも、社会人になってからでは時間がなくてやりたくてもできないと聞いたこと、あまり海外に興味のなさそうであった友人が、半年前に海外へ行きとても楽しかったと聞いたことから行ってみたい気持ちがさらに強くなった。

私にとって今回が初めての海外に行く機会で、不安と緊張があった。自分の英語が通じるのか、またコミュニケーションをうまく取れるのかという不安があった。それに、このプログラムを知るまでウガンダがどこにあるのかも知らず、家族や友人にも心配をされた。それでも実際に行って、色々なものを自分の目で確かめ体験したいという思いが強くなり、また、このプログラムの体験談を読み「考え方が変わった」という先輩がいることを知って、自分も何か変わりたいと思いこの大学のプログラム「ウガンダ海外実践教育プログラム」に参加した。

2. ウガンダに行ってみて

ここから私のウガンダでの気づいたこと・体験したことを述べたいと思う。

① 2/26~3/4

入国の際、新型コロナウイルスの影響からか他の搭乗者とは違う入り口から入国することになり少し戸惑った。体温検査まで行われ、新型コロナウイルスの対策が日本よりもしっかり行われていることに驚いた。エンテベ空港からホテルのあるカンパラまでの道は、想像以上に整備されていた。しかしカンパラ市内に着くと、信号機の少なさやボダボダと呼ばれているバイクタクシーや車の多さ、交通マナーの浸透の無さ、スピード出しすぎ防止の凸の多さなど、交通の問題が多いことに気づかされた。何度か停電を経験したが、雨が降っただけで停電になってしまっていたようなので、安定した電力供給も課題であると感じた。また、マケレレ大学や泊まったホテル、訪れたショッピングモールは本当にきれいで驚いた。食事では、想像では芋や豆ばかりだと思っていたが、ホテルや学食ではいろいろなメニューがあり美味しく頂いた。日本では食べられないようなマトケやポショを食べることができたのがよかったし、特にパイナップルはとてもおいしかった。

この期間では主に講義を受けることが多く、言語は英語ばかりで、さらに私は今まで外国人ば

かりの環境を経験したことがなかったので少しナーバスになっていた。でも今回一緒にサポートして下さった6名のティーチングアシスタントの方に助けをもらいながらウガンダの現状を、座学を通していろいろと学ぶことができた。講義を受ける前には、より理解を深めるためのティーチングアシスタントの方々による事前情報のようなレクチャーも受けた。その際、ティーチングアシスタントの方々には自国のことをよく理解されていて、自分はこんなに日本について知識も考えも持っておらず、とても感心した。

② 3/5~3/11

この期間では、様々な施設を実際に訪れてウガンダの現状を学んだ。JICAではウガンダの農業施設を実際に見学し、田植えや稲刈りなども経験させてもらうことができた。農道の整備が追いついておらず、機械の導入が難しいと聞き、単に機械を買うお金だけの問題ではないということがよく分かった。また、私は今まで稲作に種類があることを知らなかったが、陸稲・水稲というものがあり、農業用水路の整備が追いつかない地域では収穫量に差が出てしまうが陸稲をするしかない、ということを知った際には、地域や貧富の格差を感じてしまった。

お米農家の住んでいる田舎の地域を訪問した際は、水道や電気は通っていないという現状を実際に見学した。私にとっては最も衝撃的なことのひとつであった。電気が通っていない点は太陽が出ているときのみの活動と制限され、水道が通っていない点は雨水の利用や池で水汲みをしているという現状を聞いた。その水汲みは子供たちが行っていることから、教育を受けることが難しくなっているのだろうと思った。また、水質も気になった点の一つである。ウガンダは大気汚染の状態が世界でも悪いほうであると聞き、雨水の利用は体に影響が出てしまうのではないかと思った。農村に行くための道は凸凹で、初日に通った道との違いの大きさに戸惑い、ここでも地域差を感じた。

医療機関を訪れた際には、医療機器不足が問題であると感じた。建物の外で寝ている人などがいて、病床の数や明らかに医者や看護師の数に比べて患者の数が多いということを感じた。それでも難民の病人の受け入れにローカルの人は何の抵抗も持っておらず、もともとは同じ民族の人たちで植民地時代に決められた国境だから関係ないということに、とても衝撃を受け感動した。また、ソフトウェアを導入している病院では、そのようなシステムがウガンダで行われていることに驚いたが、情報の管理が行えておらず、まだまだ難しい問題点であると感じた。これらの訪問を通して自分は日本の医療の現状を知らないということを実感し、これから勉強しておきたいと思った。

③ 3/12~3/21

Murchison Falls National Parkでは、テレビでしか見たことのないような大自然に感動した。日本では経験できないようなことをたくさん経験でき嬉しかった。

Kennedy Secondary Schoolでは、先生・生徒ともに快く私たちを受け入れてくださりいろいろなことをして交流することができた。生徒のほうから話しかけてくれて、私達の考えたゲームに積極的に参加してくれるなど、コミュニケーションを取ってくれた。

最後のプレゼン発表ではティーチングアシスタントの方々にも今までに訪問したところで聞き逃した情報や知っている知識などを補足してもらいながら準備を進めることができた。

3. プレゼンテーションについて

私はマケレレ大学でのプレゼンで「水問題」についての発表を行った。このテーマを選んだ理由は3つある。1つ目は、カンパラ市内をバス移動していた際、道端で多くの水道工事を行っていたのを見たこと。2つ目は、田舎のほうに行った際、水道の整備ができていないということを知ったこと。3つ目は、子供たちがタンクを持って川に水汲みに行っている様子を目撃したこと。このプレゼンを作るにあたってまず、ウガンダの現状を調べるところから始めた。そうすると、

都会の地域と田舎の地域で水の供給に違いがあるということを知った。また、池や雨水の利用や水汲みが、子供たちの仕事となっていることを知った。この情報はウガンダに行く前の事前の学習でインターネットから少し調べていたが、実際に見て衝撃的であった。一方で、水力発電が伸びてきていることを知った。水供給に比べ電力供給のほうが低い現状で、お金を払ってまで電気を引くことは今のところ考えていない人が多いことや、盗電が行われているということも驚いた点である。次に、この現状から起こりうる問題について4つ述べた。悪い衛生環境・教育を受ける機会の不足・不安定な農作物の収穫量・交通渋滞である。これらが起こる原因には貧富の差と地域格差があるということを考えて。この現状を改善するための提案として3つの考えを述べた。インフラストラクチャーの開発では具体的に水道・農業用水路・公共トイレの設置などがよいと考えた。ウガンダ政府の政策では、今は道路など交通に主に予算の多くを割いていると聞いたので、水道設備などにも、もう少し割くべきではないかという考えを持った。技術の利用では浄水剤について少し述べた。ユニセフでは3,000円の支援から行えるということを知ったが、この最後の提案はウガンダ国内では難しいと考えられるので、私たち自身、日本人の果たす役割でもあると考える。これらの提案によって衛生環境の改善・子供たちの教育を受ける機会の増加・所得格差の解消が見込めるだろう。

プレゼンをやってみて、取り上げたテーマが大きすぎたため今のウガンダですぐにできそうな提案を具体的にできなかった点が反省であった。それに、今の自分ではこれらの問題を考えるうえで知識が足りないということを感じた。これからの勉強のモチベーションを上げるためのいいきっかけになった。

4. 最後に

最後に、今世界中で問題となっている新型コロナウイルスによって、他の留学プログラムが中止や日程変更となっている中、予定通り日程が進んだことに本当に恵まれていたと実感しているところだ。鳥取大学の先生方、マケレレ大学の先生方、各訪問先で受け入れてくださった方々など、今回の留学に協力してくださったすべての方々に本当に感謝している。特に今回の留学をサポートしてくださった現地のウガンダのティーチングアシスタントの方々は、英語が苦手な僕にもマケレレ大学のレクチャーを受けている際、「ここ分かる？」や「大丈夫？」と気にかけてくれたことがあった。お土産屋さんにも店員さんは親切丁寧に接客してくれた。ウガンダ人は本当にやさしい人たちばかりでウガンダが好きになった。また、一緒に行ったメンバーにはすでに大きな夢を持っている人もいて、とても良い刺激をもらった。

反省として、よりコミュニケーションを取るには現地語をもっと使うべきだったと思った。自分が日本語を使って話しかけてくれたのがうれしかったように、基本的なフレーズを覚えてたくさん使うことが簡単に仲良くなれる方法の一つであると実感した。ぜひ今後の活動で実践したい。

今回の留学は人生において最も充実した経験の一つとなった。海外に興味をわき、国際協力にも関心を持つきっかけになった。これからの人生において今回学んだことを活かしていきたいと思う。

5. 撮った中で印象に残った写真について

ここからは私が実際に撮った写真で衝撃的だったものを添付する。



ボダボダは車の間を通過してまで前に進んでおり、交通誘導員がないとうまく車が進まないような現状であった。今回の移動はバスで行われたが、何回か他の車にぶつけられることもあった。一人ひとりの交通マナーの意識改善が必要であると感じた。



川から水を汲んで運んでいる様子である。子供や女性が多い印象を受けた。



カンパラ市内を流れていた川の様子で、ごみが多く捨てられていた。この川で洗濯している様子も実際に見ることができ、衛生環境が問題であると実感した。



ホテル近くの用水路を流れている水を飲む牛の様子である。この川の水質はいいとは言えないような色をしていた。水質の改善が必要であると感じた。



バス移動中このような工事中の現場をたくさん見かけた。国立公園を訪れた際も道の工事が多く行われていた。そのほとんどが中国の支援であり、その後話を聞くとアジアでは中国はインフラなどの建設分野を支援しており、日本・韓国は農業や衛生、教育の支援をしていると知った。例絵として、魚を与えるのではなく釣り方を教えることが重要であるというものがあるが、私は現状を見ると物資の支援のほうが今は必要であると感じた。



JICA の施設を訪れた際の農業用水路である。多くの農家さんの田んぼがこのように整備することができれば一定の収穫が見込め安定した収入を得ることができるだろうと感じた。



田舎地域のお米農家さんを訪れた際の住居である。見てわかるように電気が通っていない現状を知り、都会との格差が問題であると強く感じた時であった。

ウガンダ海外実践教育プログラムを通して

農学部生命環境農学科植物菌類生産科学コース2年

石坂 知英里



目次

- ①ウガンダに行く前の自分
- ②ウガンダで生活した時の自分
- ③プレゼンテーションについて
- ④ウガンダで考えたこと・得たもの
- ⑤最後に

① ウガンダに行く前の自分

私がこのプログラムに応募した動機は、「アフリカの文化や生活様式はどのようなものか、実際に自分の足で訪れて見てみたい」という単純な思いであった。アフリカは治安が悪く、あまりインフラ整備もされていない危険な場所という自分の偏見や固定概念から一人で行くよりも学校のプログラムで行った方が安全に行けると思い応募した。私はもともと英語が大の苦手であり成績もよくはなかったが、人と会話をすることが大好きであった。また、国内外問わず旅行をすることが好きで、探求心や好奇心は人一倍強い性格であった。訪れる前にウガンダについてインターネットを用いて調べてみたが、ウガンダの人々に関する情報(衣・食・住)についての詳細を得ることが難しかった。私は農学部ということもあり、「食」の面からウガンダの現実や問題点にアプローチしようと考えていた。ウガンダでは日本と同じ一日三食を基本としている。しかし、日本では種類の主食に対し主菜や副菜などのおかずが多様であるが、ウガンダでは主食が多様である。また、ウガンダ人はほぼ決まった食生活でありバリエーションが少ないにもかかわらず、同じ食事でも飽きずに食べ続けられるという情報を知り、ウガンダ人は日本人のように好き嫌いはないのかという些細な疑問が浮かび、調査テーマとして決めた。日本で情報を集めようとしたが、JICAのホームページには食育に関する情報はなく、実際に現地で問題となっていないのではない

かという疑問を持った。

② ウガンダで生活した時の自分

ウガンダ到着後、すぐに日本大使館を訪れた。大使にお話を伺う貴重な時間にとっても緊張したが、ウガンダの現状(難民の受け入れや周辺諸国との関わりなど)や課題、国際協力について概念や姿勢について例を用いて説明していた点がとても分かりやすく理解できた。わたしは「国際協力のよう海外に視点を当てるのは日本国内での問題を解決してからだ」と自分には無縁な話だと考えていた。しかしお話を聞いて、開発途上国内の問題を協力して解決に導き、その国民の意識をどのように変えていくか、という違った観点で物事をとらえて行動していく姿勢がとても大切だということに気づかされた。

JICA 訪問では、組織の仕組みを詳しく知ることができた。ウガンダ政府から直接要請された事を検討して行動するという流れが存在することを知らなかったため、やはりウガンダで困っていることは交通問題が多いと予測できた。実際疑問としていた「食育は行われているか」という問いには「聞いたことがないため行っていないのではないか」とのことで、望んでいた回答は得られなかった。ウガンダでは入手できる食品の種類が日本と比較して大変少なく、ウガンダの内陸国という地理的条件が消費者の食品などの選択肢を狭めている原因が考えられた。

NERICA に関する講義を受けた際、ウガンダの農業の特徴や現状について現地の声を聞くことができて貴重な時間になった。その後の農場見学で、とても慎重に作物を取扱い、かつ丁寧な指導を行うことで生産性の向上を図ろうとする熱心な姿に心を打たれた。「農家さんのモチベーションをどのように保つか」という農業の分野以外の視点も必要になってくるため、農業における国際協力には多角的な視野が必要だと学んだ。

わたしは医学に関する知識が少なかったが、様々な病院を訪れたことで医療分野や衛生に関して興味を持つことができた。ムバララ病院を訪れた際に、エボラに罹った患者を隔離するスペースを見学した際、日本にいたころは「エボラ出血熱＝アフリカ」と自分に関係ないことのようにニュースを見ていたが、それは全くの間違いで決して他人事にははいけないことを自分の中で反省した。

ウガンダでの生活は日本で思っていたよりも苦ではなかった。食に関してイモばかりの生活だと思ひ覚悟はしていたが、マトケやアフリカ米が主流で芋はサブ主食のポジションだったことに驚いた。マトケは見た目スイートポテトのように甘そうだが実際は酸味があり、日本人の口には合わなそうだと感じた。それに対してサツマイモやカボチャは日本のものよりもととても甘味が強く美味しくかった。ジャックフルーツやグアバなど、あまり日本では食べれないようなものにも挑戦することができた。宿泊したホテルでは、値段は同じなのにもかかわらず部屋によって差が大きく、カルチャーショックを受けた。しかし、何らかの要求をフロントに伝えると素早く行動してくれ、臨機応変さや人柄の良さが伝わり気持ちのいいものであった。休日になると 20:00 頃から外で急に大きな音で音楽が流れだし、パーティーが至る所で日常的に行われている点でアフリカらしさを感じた。カルチャーセンターを訪れた際にダンサーの方々がとても楽しそうに音楽に乗りながら踊っており、文化を知るとともにその慣習が今でも残っていることに気づいた。水道設備について、ホテルのシャワーはお湯が出たり出なかったりして少し不便であったが、Mbarara に向かう道中で茶色く濁っている川から多くの女性がタンクを頭にのせて歩いているのを見かけ、水のアクセスが難しい地域は多くあるのだと気づき、普段の生活がどんなに恵まれているか思い知った。協力隊員の方々を訪問した際、女性の社会的立場について基本的厳しい家庭での労働を女性が担当する、と教わりウガンダでのジェンダーに関する問題について興味を持った。

ウガンダでは TA さんと長時間接していたが、ウガンダ人の人柄の良さや温かさ、優しさをとても感じる事ができた。日本のものをプレゼントするとお返しをくれたり、お土産屋さんでプレゼント交換したりととてもいい思い出になった。



写真:もらったプレゼント

左上:名前の刺繍が入ったミサンガ

右上:ウガンダカラーのミサンガ

下:名前にちなんださくらんぼのピアス

下敷:スカーフ

会話は簡単な単語で話してくれたおかげでとても聞き取りやすかったが、私自身の単語力が低いせいで表現があまり多く使えなかった点や、極端な例しか使えなかった点で相手を困らせてしまうこともしばしばあったことがとても悔しかった。しかし、今でも SNS で会話が続いており、とても大切な友達ができたととてもうれしい。会話をしている一番驚いたことは、早寝早起きをウガンダ人みんながすることだ。日本の学生は夜更かしをすることが多く、朝早く起きることもめったにない。実際わたしも早起きは苦手である。しかし、22:00 には就寝し 5:00 には起きるといった生活リズムが備わっているらしく見習う必要があると感じた。

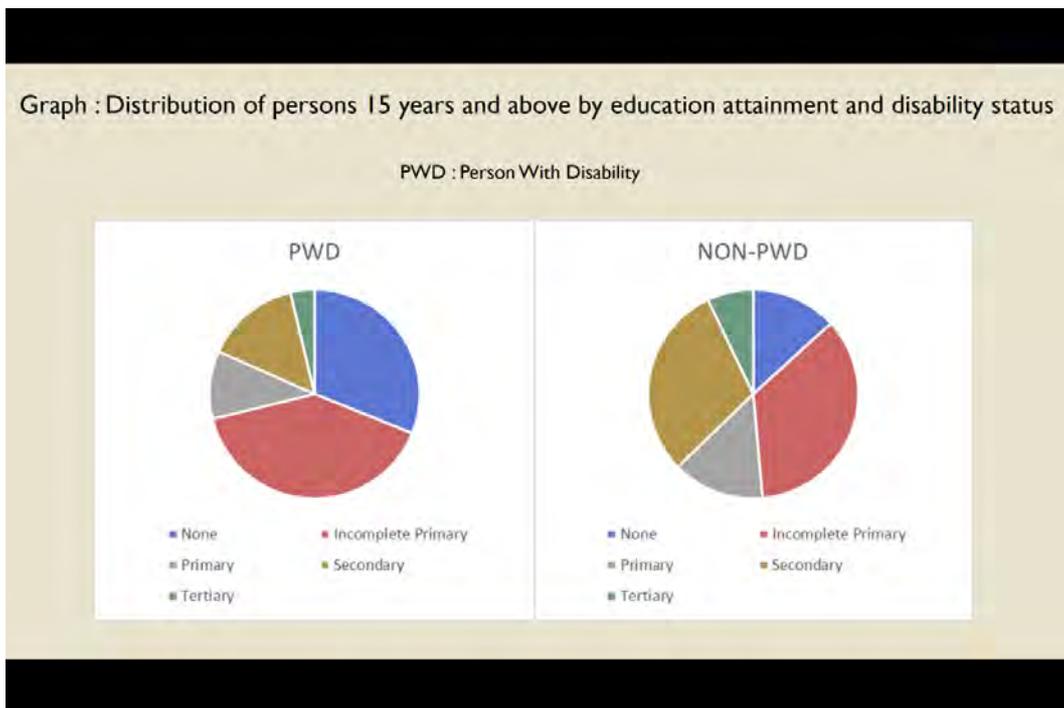
③ プレゼンテーションについて

カンパラ市内を移動していたバスの中で渋滞に巻き込まれたことがあった。西日の強い時間は渋滞がひどく、両手や頭上に果物を山盛りに積んだ人々が車と車のわずかな隙間で販売をしていた中、一人の男性を見かけた。その男性は片腕をなくしており、痩せた身体で車窓をのぞき込んでお金を要求していた。その姿を見て、ウガンダでは第一次産業が主流の中、障害を抱えている人々はどのような暮らしをしているのか疑問に思った。ホテルに戻り、インターネットで検索した結果、ウガンダは長い内戦の影響で障害者が多いということが分かった。そればかりでなく、ボダボダ（バイクタクシー）の無理な運転や交通マナーの悪さによる事故などもその要因に挙げられると考えた。私はこのハンディキャップに対するウガンダの現状を織り交ぜながらプレゼンテーションを行った。

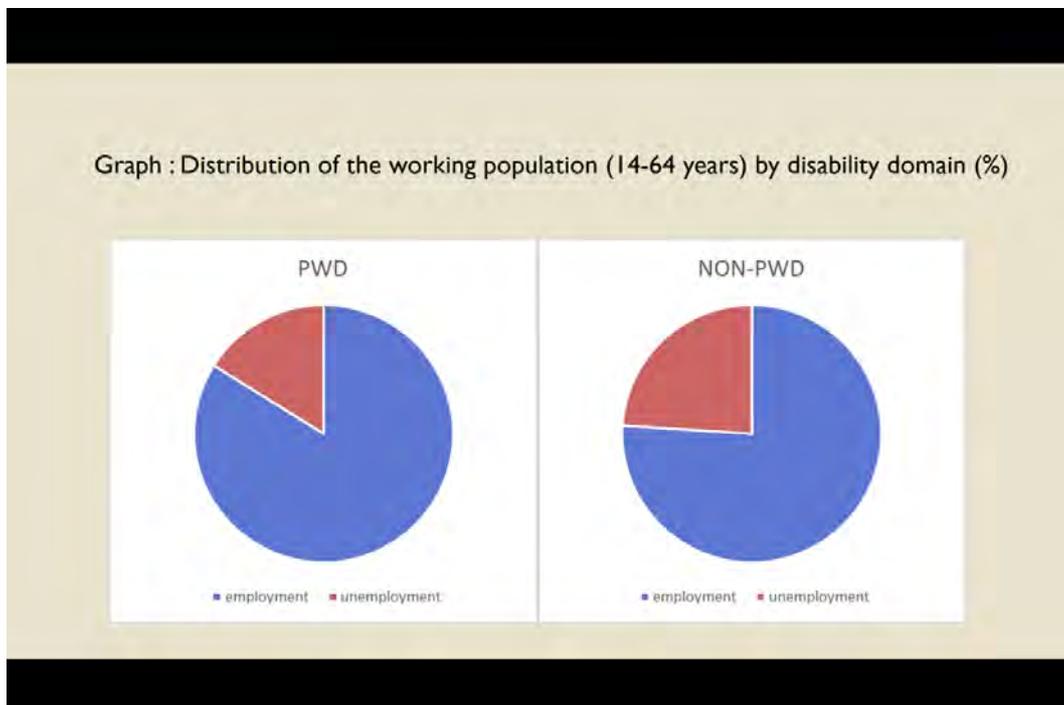
プレゼンテーションの流れは、ハンディキャップについての説明、抱えている人の数、要因を調査した後、ハンディキャップを抱えている人の直面している問題点について具体例を挙げて詳細に説明した。また、政府の行っているサービスと現状を踏まえて提案を行った。ウガンダでは大きく精神障害と身体障害の2つのカテゴリーに大別される。精神障害には発達障害も含まれている点において、日本と少し異なる。また、ウガンダでは2014年における統計で身体障害を抱えている人の割合が精神障害を抱えている人の割合の約2倍であることが分かった。日本の2019年における統計で人口に対する障害を抱えている人の割合は7.75%に対し、ウガンダでは12.80%と高い割合を占めていた。しかし情報のアクセスに疎い田舎の方で正確なデータを得ているとは言い難く、データの信頼性は低いと考えられる。障害を抱える要因は先述のとおり、長期間の内戦や交通量のひどい環境による事故のほかにも病気や生まれながらに抱えたものが挙げられると考えた。

続いて障害者が直面している問題点として3つ挙げた。1つ目の問題点は今回のテーマを決断した理由でもある、雇用の機会が少ないことである。ここでは3つのグラフを挙げ、ハンディキャップを抱えている人の教育と就職の機会を紹介した。

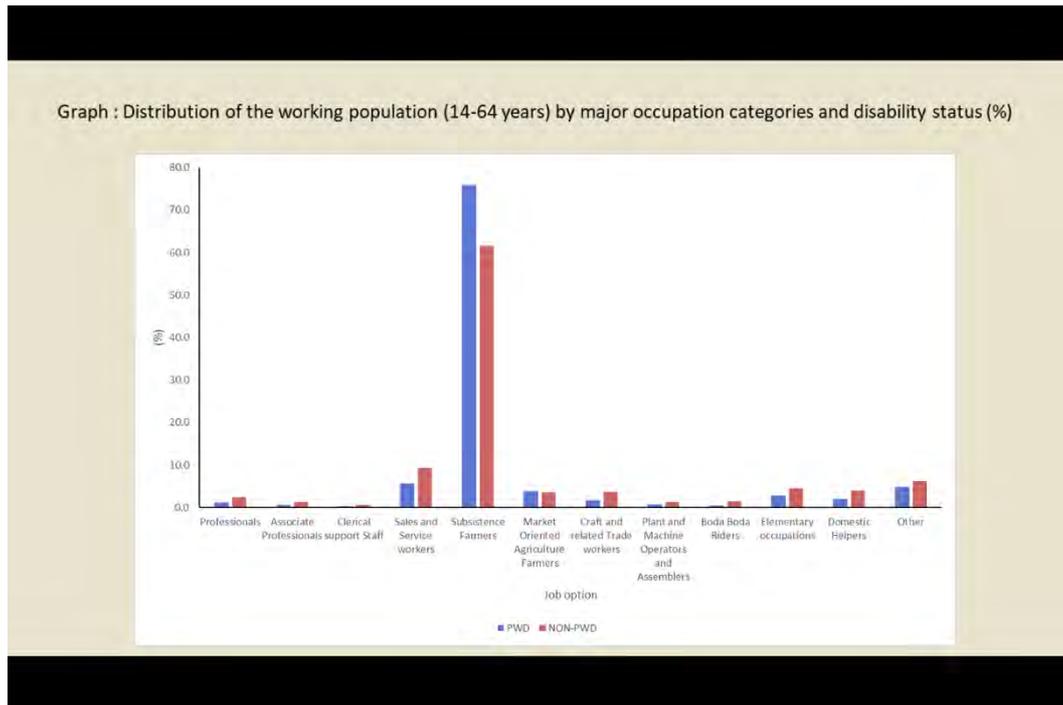
(参考：Persons With Disability BRIDGING THE GAP THROUGH STATISTICS THEMATIC SERIES BASED ON THE NATIONAL POPULATION AND HOUSING CENSUS 2014 より)



グラフ 1 15 歳以上の教育の機会の割合 (PWD:障害者)



グラフ 2 14 歳から 64 歳までの労働人口の割合



グラフ 3 14 歳から 64 歳までの職業別労働人口の割合

グラフ 1 より、31%の 15 歳以上の障害者は教育を一切受けていないという結果が報告された。また、学習レベルが上がっていくにつれて退学者が増加傾向にあった。このことについて、障害者は学校にアクセスすることが困難であることが原因であると考えた。しかしグラフ 2 から、14 歳から 64 歳までの障害者は同年代の健常者に比べて労働人口の割合が高いことが報告された。このことは、学校に行くことができないために労働人口が健常者よりも多くなっていることが考えられた。また、グラフ 3 より、農業や農作物の販売で生計を立てている障害者の割合が非常に多く、そのほかの職業に就いている割合がかなり低いことが分かった。マケレレ大学の講義内でウガンダでは農業をはじめとした第一次産業の従事者が多いとあったが、特に障害者の割合が多い点から、障害が職業の選択の幅を狭くさせており、課題であることが考えられた。

2 つ目の問題点は、高い場所や建物に入れられないことである。今回の留学ではカンバラ市内を中心に行動していたが、丘が多く坂道や階段が多い印象を受けたが、道は舗装されていても凹凸や穴が開いている箇所が多く見られた。またスロープを見かけることがなく、車いすの人々はどのように生活し行動しているのかとても気になった。宿泊したホテルでもエレベーターではなく、廊下に 7cm ほどの段差も見受けられた。障害を持っている人には生活しづらそうだと強く感じた。ウガンダは発展途上国で道路整備を進めていると聞いたのに、なぜ階段の横に少しの坂を建設できないのかと疑問に思った。

3 つ目の問題点は差別である。TA さんは、「ハンディキャップについてあまり良く言われていない」と言っていた。このことは市民の障害に対する理解の低さや、未だに田舎の地方に根強く残る偏見などが影響していると考えた。

次にウガンダ政府はどのようなサービスを行っているのかを調べた。その結果、スロープの建設、手話や点字の周知や理解、障害者に対し地域ごとに 1 年に 3,000 万円の補助金、雇用や教育の機会援助など多岐にわたる補助を行っていた。しかし、裕福な人のみサービスを受けることができる現状であった。教育はあまり受けられておらず、点字を街中で見かけることもない点から、援助が不足しているように思えた。TA さんは、「このような規則はあっても実現されていないのが現状」と言っていた。これでは機会の平等ではないし、富裕層と貧困層の間に大きな経済格差が生まれると考えた。政府の行っているサービスは不十分である。

ウガンダ政府は障害者に関する法律を定めており、そこには学習や労働の権利が含まれている。しかしうまく機能していないことに対してもっと行動を起こすべきだと考えた。貧困な障害者に対して経済的な援助を増やすべきである。特に田舎の地方においては十分な情報を得ることができていないため、政府は障害者に関する知識や情報を多く発信するべきであると考えた。案としては、学校の美術の時間に障害者やバリアフリーに関するテーマでポスターを描き、街中(掲示板)に貼っていくというものを挙げた。この案は若者に障害者の理解を促すことができると同時に、市民にもポスターを見てもらい少しでも興味を示してもらうことができるのではないかと考えた。また、ウガンダでは若者が仕事に就くことが困難であるために起業することが多いと聞いた。そのため、日本のように一般企業が障害者を雇用することで一定の補助金を企業側が受け取ることができるサービスを導入する案を考えた。この案は障害者雇用の促進と企業成長、経済循環につながるのではないかと考えた。ウガンダ市民全員がよりよく暮らすために、政府が、社会全体が変わることが大切であると考えた。

④ ウガンダで考えたこと・得たもの

今回の留学を通して、普段の海外旅行とは異なる視点からウガンダという国を見つめることができたと感じる。人間力は知力、気力、コミュニケーション力、体力、実践力の5つのカテゴリーからなるものであるが、そのどれもが今回参加したことにより身についた。特にプレゼンテーションでは「日本から来た自分」がウガンダに実際に訪問して感じたこと・考えたことを踏まえて課題を見つけ、それに対してどのように行動すべきか、解決策は何か、ということ自ら模索した。また、約3週間一緒に仲間たちと過ごす経験も今までの人生で初めてのことであったが、トラブルなく楽しんで生活を送ることができた。適度にお互い会話をし、歌を歌い、体を動かしたことが、ストレスをためずに過ごせた秘訣だと考えた。また、英語に直接触れる機会はめったにないため、毎日TAさんと自ら話に行くように心がけた。この3週間で過ごした経験は確実に自分の中で何かが変わったと思う。日本に帰国してから、以前より節水するように心がけ、お金の大切さを感じるようになった。また新しい自分のやりたいことが見つかった。ウガンダは子どもの数が非常に多いのに対して遊ぶ場が少ないことが自分の中で引っかかっていたため、児童館をつくってみたいというものだ。おもちゃは高価であるため、なかなか手が出せない家庭でも、児童館に来ればおもちゃで遊んだり遊具で体を動かしたりすることができると考えた。また、交通量が多い中で安全に遊べる場が少ないように感じたため、児童館が必要だと思った。今は学生でお金がないが、社会に出て資金をためたらもう一度ウガンダを訪れて、未来のある子どもたちに楽しい思い出をつくってほしいと考える。海外の文化や慣習に目を向けるだけでなく、日本のことをよく学習することが大切だと感じた。受動的になるのではなく、自らが積極的に日本の政治や文化、マナーなどを海外に発信していくことが大切であると感じた。

⑤ 最後に

このプログラムは多くの大学関係者の方々やマケレレ大学関係者の方々、そしてTAさんをはじめとする現地の方々のご協力のおかげで、一生に一度のとても良い経験をする事ができた。この感謝を忘れずに、このプログラムで踏まえた経験をこれからの学生生活に活かして有意義なものにしたい。ウガンダの方々の学ぶ姿勢を見習い、私に今一番足りない英語力を伸ばしていきたいと思う。様々なことにチャレンジし、新たな目標に向けて一日を大切にしていきたいと考える。

ウガンダ海外実践教育で学んだこと

農学部生命環境農学科 1 年

芝 玲奈

目次

1. はじめに
2. ウガンダの農業
3. 国立公園
4. プレゼンテーション
5. 最後に

1. はじめに

私は、アフリカの貧困問題に興味があり、将来、貧困で苦しんでいる人々を少しでも手助けできるような職業に就きたいと考えていたので、現地の状況を知るための 1 つの方法として参加しました。

このプログラムに参加する前のウガンダに対しての私のイメージはアフリカの中では治安がいいとはいっても、貧困問題を抱えており、国民の生活は苦しいもので、生きることに苦勞しており、マラリアやエボラなど怖い病気にかかる危険性がある、というようなネガティブなものばかりでした。ですが実際は、確かに貧困問題も抱えており、生活もその日その日を精一杯生きているというようなものでしたが、都市の人々も地方の人々も皆、笑顔で幸せそうに暮らしていました。それを見たとき、幸福という観点において日本よりも豊かな国なのではないかと思いました。また、ウガンダで出会った人たちは皆、疑問に感じたことを質問すればどんな分野においても答えてくれるうえに、政治に対する関心が高く、気後れするほどでした。政治など一つとっても日本にあまり関心を持っていなかったのも、何も知らない自分が恥ずかしいと感じる機会が多々ありました。政治に対する興味、関心、意識の高さなど敵わないものが多くあり、自国のことなどに興味を持ち、大学で学ぶことも含め、勉学に勤しまなければならないことを痛感しました。

このプログラムではマケレレ大学や JICA をはじめとし、いろいろな場所に訪問しました。まずマケレレ大学は、歴史や農業、経済などを学び、最後のプレゼンテーションを発表した、一番思い入れの深い場所です。授業は英語を理解することに必死でついていっただけで精一杯だったので、教授が私たちに質問してくださった内容について真剣に考える時間はとても楽しかったです。経済の授業の際に、GDP について学び、ウガンダの GDP が想像以上に低く驚きました。自分たちと同じように行動してくれていた TA さんたちからは自分たちとの生活水準の差をあまり感じず、より裕福なのではと思うくらいの雰囲気さえあったため、途上国といえどもそこまで貧しい国でないと勝手に思っていました。ですがそれは周りを見ることができていなかっただけで、よく見ると靴すら履けない人もいれば、栄養失調のためにお腹が膨れている子どももいたことに気づき、反省しました。ウガンダは内陸国のため、貿易に多くの費用がかかることが大きな要因であることを学び、日本が発展したのは島国であることも関与していたことを知りました。また、日本から技術を輸出し、その技術を取り入れ、製品をつくったとしても日本はその製品を輸入しないためウガンダの GDP は上昇しないと教えてもらいました。私は今まで途上国が発展できない一番の要因は技術の不足だと考えていました。しかし、この授業を受けたことにより、その考え方は間違いだったことに気づくことができました。技術の不足も大きな要因の一つではあり、それを輸出することも大切ですが、それを収益にするための確かな貿易の航路を整えるまで協力することで、やっと途上国の人々の手助けになるのではないかと考えました。マケレレ大学での授業は刺激的なものが多く、自分が持っていた考え方に対して疑問を持たざるを得ないものばかり

りでした。このように、ウガンダの実情について詳しく教えていただき、改めて考える機会をくださった先生がたには感謝の意しかありません。



1. ウガンダの農業

JICA 訪問の一環で NERICA について学ぶ機会がありました。NaCCRI ではコメの研究がなされており、田植えや脱穀などを体験させてもらいました。私は途上国といえば豆やイモ、バナナを主食としているイメージが大きかったため、コメが主食として存在していることにも驚きました。日本では水稲が主で陸稲はあまり見かけませんが、ウガンダではどちらも行われているそうです。私はコメを育てて販売する学外団体に所属しているので日本のコメとどう違うのかに興味がありました。実際、コメを見ると細長く、ばらばらとしており、視覚的にも日本のコメとは全く違うものでした。種を稲に育て、それを田に植え、脱穀するという一連の流れは全くといっていいほど同じであるように思えました。味や見た目が全く違うのは、天候や土壌により、日本と同じような品種が育ちにくいためであろうと考えると、自然とは偉大であり、不思議なものだと思いました。ウガンダではコメは主食というよりも換金作物として育てるそうなので、比較的余裕のある農家の方しか育てられないことを知り、いつかウガンダの人にも日本のコメのおいしさを知ってもらいたいと思いました。



2. 国立公園

私がこのプログラムの中で最も印象に残った場所は国立公園です。私はウガンダに行く前、国立公園がどんなところか全く知りませんでした。しかし、実際に行ってみると、国立公園に行くまでの森の中で数匹のサルをみることができ、ボートクルーズではワニやカバ、バッファローなどいろいろな動物を見ることができました。去年の学生の方々はワニを見ることができなかったことを聞き、



今回は早々に見ることができたので、運が良かったと皆で盛り上がりました。ボートクルーズの後は滝の上にバスで移動し、滝を間近で見ることができました。そこには幻想的な景色が広がっており、言葉では言い表せない感動がありました。現地の方の話によると、そこは数年後に閉鎖されるというので今回、行けたことを嬉しく思うと同時に、あの素晴らしい景色をもう見るができなくなるという悲しさでいっぱいでした。

その複雑な感情を抱えたまま国立公園のロッジに行きました。そこは森の中のため、虫もたくさんいれば水も電気も限られており、暮らしやすいとは言い難い環境ではありましたが、焚火を焚いてくださっていたので、そこで、夜遅くまで星空をぼんやりと静かに眺めていた時間はとても有意義なものでした。二日目はキリンやゾウ、ウガンダの鹿のような動物など今まであまり見たことのない動物も見ることができました。その鹿のような動物にハイエナが後ろから迫る光景を見たときは感動しました。前日の雨により道路がぬかるんでいたため、バスが横転しかけてし



まいました。しかし、私たちのベストドライバーであるファーロックさんと、皆が泥だらけになりながら力を合わせることで、バスは横転することなく、無事、運転を再開することができました。ですが、このとき、ハイエナが後ろから迫ってきていました。私たちは誰もそのことに気づいていなかったのですが、後ろの観光客の方々が教えてくださいました。そのことを知ったときは驚きと恐怖で鳥肌が立ったと同時に、教えてくださった方々に対する感謝であふれました。

3. プレゼンテーション

私がウガンダに来て衝撃を受けたのが、想像以上のごみの量でした。いたるところに放置されているごみだけでも衝撃だったのですが、ヤギや牛などの動物はまだ想像できたとしても、善し悪しの区別がつかない、何も知らない人間の子どもまでもが道端に放置されているごみを食べてしまうことを聞き、やはりこの問題はより重要視されるべきなのではないかと考えたため、ウガンダにおけるごみ問題についてのプレゼンテーションをしました。

プレゼンテーションでは、日本とウガンダでのごみに対する扱いの違い、なぜウガンダでごみのポイ捨てが減らないのか、ごみがどう環境に影響を及ぼすか、適切にごみ処理をしたときの利点を発表し、最後に、費用を減らし、きれいな環境を保つために、家で分別できるように基準を作り、習慣化していくことを提案しました。

ムバララ病院に訪問した際、JICAの協力隊員の方が、その病院の部屋が汚かったため、掃除した部屋を見せたところ、現地の病院の方々はそれを基準として部屋を整頓していることや、エボラなどの感染症の患者の衣服や手術などで摘出した内臓など感染の危険性の高いものは焼却処分をされており、それにはお金がかかることを知り、ウガンダには分別の基準がなく、知らないだけでそれさえあればそれをもとにごみを分別するなど適切な扱いをすると同時に環境や衛生をよりよいものにできないかと考えたからです。

ウガンダではごみを捨てることにも



お金がかかるそうなので、国からの補助を得、国民から無償でゴミ処理場に処理してもらうことが最善なのではないかとも考えましたが、それはなかなか実施できるものではありません。私が提案したのも国から補助金をもらうことよりは容易いことだとも考えられますが、ゴミを区別などする余裕もない人も多く、国民性においても求めるだけで従う人はほぼおらず、ゴミの危険性も知っている人が少ないため、強制し、罰を与えなければ実行、浸透されにくく、ゴミ問題が改善に向かう最良の策とはいえません。いくら考えても思いつく策は行動に移すのは難しいことばかりでした。そのため、私は改善策が見つかることができませんでした。ですが、いずれはどんな人でも、環境のためにも自分たちのためにもゴミが適切に扱えるような改善案を見つけないとと考えています。

4. 最後に

私たちは今回、コロナウイルスで世の中が混とんとする中、ウガンダに行くことができました。少しでも予定がずれていけば行くことができなかつたところもあれば、そもそもウガンダにすら行けておらず、行けたとしても日本に帰ることもできなかつたかもしれません。私たちは本当に運に恵まれており、神様が味方してくれていたのではないかと感じるほどでした。このような奇跡のような経験は忘れたくても忘れられない、一生に残るものでした。

今回、自分の意識の低さや無知さを思い知りました。発展途上国というイメージだけで貧しく、生活に苦しんでいるというような先入観をもってしまっていた自分が恥ずかしく感じるくらい、現地の方々は皆笑顔であふれており、幸せそうでした。いくら貧しい生活をしていようともその人が幸せと感じているのなら貧しさは何の問題にもならないのではないかと思います。このように、今までの考え方を見つめ直すことのできた経験が無駄にすることなく、このプログラムで得たウガンダでの人々の考え方や意識の高さを念頭に置き、自分に何ができるのかを改めて考え、そのできることを一步一步着実に進めていきたいと考えています。

私はあまり英語が得意ではありません。そのためにマケレレ大学での授業を理解することも難しく、TAさんや友だちに迷惑をかけてしまいました。英語が解らないために自分が言いたいこともはっきりと話せず、TAさんたちともあまり話せなかつた自分がすごく悔しく、情けなく感じました。海外でも通用する人材になるために、まずは自分の意見がはっきりと英語で話せるようになるまで、英語や世間について勉強しなければならないことを実感しました。

今回、日本人に合わせた行動をとってくれ、私たちの学びのサポートをしてくださったTAさんたちには感謝してもしきれないと考えています。TAさんたちと対等に話せるようになるために、まずは自分の専攻分野をはじめとし、それに留まることなく、幅広い分野の情報を収集し、多面的な考え方ができるような人になりたいと考えています。



鳥取大学ウガンダ海外実践プログラムに参加して

農学部生命環境農学科 1 年

寺田 晃盛

目次

- 1, ウガンダ海外実践プログラムに参加したきっかけ
- 2, ウガンダに来て学んだこと
- 3, なぜウガンダの農家は高収入を得られないか
- 4, ウガンダの教育システムについて
- 5, 解決策
- 6, ウガンダを訪れて感じたこと
- 7, 最後に

1. ウガンダ海外実践プログラムに参加したきっかけ

私は2月26日から3月21日に鳥取大学が主催するウガンダ海外実践プログラムに参加した。この研修に参加しようと思ったきっかけは、私の将来の夢が農業高校の教師であり、大学在学中により多くの国の農業を自分の目で見に行き、そこで得た経験を生徒に伝えたいという思いがあったからである。

私は事前研修で、人口の7割の人々が農業を営んでいるということ、GDPが一人あたり680USDととても低い水準であり、また農業がGDPに占める割合が22%ととても多いことを知った。さらに農業の技術を教えるようなJICAが関連するプロジェクトはないことを知った。私はこのデータからウガンダでは農業がとても盛んであると感じ、農業教育をテーマに参加した。具体的には農業を営んでいる人々はどのようにしてスキルや知識を得ているのか、農業高校や農業大学校のような農業を教えてくれる教育機関は存在するのか、また、農家がどのような問題を抱えているのかである。



2. ウガンダに来て学んだこと

次にウガンダで学んだことを論述する。ウガンダの気候は私が想像していたより遙かに好印象を受けた。乾期と雨期があり、年間1000mm~1500mmの降水量がある。さらに火山があり、火山灰土が降り注ぎ肥沃な土壌があることを知った。これらの恵まれた気候から、作物を定植してから、ほとんど何も管理をすることもなく収穫することができるという。私はこれからウガンダが発展して行くにあたり、この環境は大いに有益であると感じた。



ウガンダの農家は Commercial、Subsistence、Domestic の大きく三つに分けることができる。Commercial は日本語の意味の通り、商業メインであり法人のようなイメージである。Subsistence は全農家の6割を占める。生産物は基本自家消費であり、余った分を市場で売りお金と交換する。Domestic も Subsistence と基本体系は同様である。Domestic と Subsistence の大きな差は、売る量と自

家消費する量の割合の差である。Subsistence は、自家消費より市場に売る量が上回っているのに対し、Domestic は自家消費の方が上回っているのが特徴である。Subsistence の農家は平均 2.5 エーカーの土地を持っている。日本と比べると少しウガンダのほうが上回る広さである。

3. なぜウガンダの農家は高収入を得られないのか

これらの学びから、日本と変わらない土地と気候を持ち合わせながら、なぜ農家の所得が向上しないのだろうかという疑問を持った。23日間都市や農村を訪れ、バスの車窓を見る限り、日本人には到底農地とは思えないような畑がひろがっていた。作物を等間隔に植えたり、土作りをしたり、肥料や農薬を使っているような光景を見ることができなかった。実際には作物の間隔はぐちゃぐちゃで、下草は生い茂り、耕作をしている土は大きな土の塊が見られ、農村部ではコーヒー、マンゴー、マトケ、バナナ、キャッサバが寄せ植えのように植えられていた。このような状況であれば私は農家の所得は向上できないと感じた。私はこのような現状を前にし、農業教育が重要ではないかと感じるようになった。また、ウガンダの人口は10代が大半を占めており、人口ピラミッドはきれいな富士山型である。このことから、現在農業を営んでいる中年層向けではなく、ティーンエイジャーへの農業教育が重要ではないかと感じた。



4. ウガンダの教育システムについて

ウガンダの教育システムは小学校7年間、中学校は4年間、高校は2年間その後大学に進むか、専門学校に進む。また、女子や低所得者は金銭面、体調、家業である農業の作業等により、学校に通うことができず、ドロップアウトしてしまう問題を抱えていた。

私はこの研修で Kennedy secondary school を訪問した。そこで、中学生には農業教育を行っていることを知った。実際に農作物に関する研究発表をしていただき、ウガンダの子ども達の勉強に対する熱意をひしひしと感ずることができた。しかし私はこのような教育を受けていながら、実際の現地の農業に生かされていないと感じた。

この要因には大きく二つの理由があると思う。一つ目は訪問した Kennedy secondary school は中上流階級の家が通学していることである。中上流階級の人々は農業を営まず、サービス業などの第三次産業に携わっていると考える。二つ目は教え方だと考える。Kennedy secondary school で農業関連の研究発表を聞いた際、どの生徒も植え方やその作物の栄養についてはとてもよく知っていたが、その後の管理方法は知らなかった。私はウガンダ人と私とでは農業教育の意味に食い違いがあると感じた。私が考える農業教育とは知識だけではなく、実技を通じたテクニックを教えるものであると考えている。しかし、マケレレ大学の TA さんと農業教育について話をしていると、教室での座学の授業をイメージし、実習などの実技をイメージしてくれる人は誰一人としていなかった。また実技をメインとする教育システムを理解してもらうことにとっても時間がかかった。



5. 解決策

私が考える農業教育とは前述したとおり、知識だけでなく実習を通じたテクニックを教えるものと考えている。具体的には肥料や農薬の使い方や農機具の使い方、畝の立て方、収穫物を高く売る方法などである。

私は以上の問題の打開策として、10代、20代への農業教育が重要であると考え、農業教育を専門にする農業教育機関の設置を提案する。しかし農業高校の有無を調査したが、人により回答が異なり、本当に農業を専門的に学ぶ教育機関があるのかどうかはわからなかった。具体的には日本の農業大学校のようなイメージである。ウガンダの現在の教育事情を鑑みて、中等学校を卒業した者が入学できるものとする。学校は各県に一つ設置し、履修期間は1年とする。学生は肥料や農薬の散布の仕方や種類、量、時期や畝の作り方などの整地の仕方、トラクタや草刈機などの農機具の使い方、農作物を高く売る方法、簡単な英語と数学など実習をメインとしたテクニックを重視する教育を学ぶ。また、学生は学校の農業を他の学生と授業を通して共同で管理する。基本学校では、ウガンダでのポピュラーな作物と家畜の育て方を学ぶことができるが、地域によって特産の作物が異なるため、特に特産の作物や家畜に関することを学べる。最後に一年間所定の単位を修め、卒業要件に達したものには卒業証明書を与える。この学校の設置によって、手厚くより多くの人に高度な農業技術を提供でき、さらなるウガンダの経済の活性化に繋がると考えている。ウガンダでは、一次産業と三次産業は盛んであるが、二次産業はあまり盛んと感じることがなかった。この学校では生産した作物の加工技術も教えたいと思う。

このプロジェクトを成功させるには多くの課題が山積していると思う。一番の課題は教師の人材確保と資金の確保である。どのプロジェクトも遂行するにあたり、まずはじめに乗り越えなければならない課題であり、私は政府や投資家にこの学校設置のメリットを丁寧に説明することで、乗り越えたいと思う。私の希望として、私学の学校ではなく国立か公立の学校とすることで、安価な授業料で多くの Subsistence の農家の人々に学んでもらいたい。また、ウガンダの人々に対して、どのような教育機関であるのか、通うことでどのようなメリットがあるのか、座学ではなくテクニックがメインであることを理解してもらうことが非常に重要であると思う。

6. ウガンダを訪れて感じたこと

●Lecture1,2,3

私たちはウガンダを訪れ、マケレレ大学について、ウガンダとアフリカの歴史、ウガンダの農業についてのレクチャーをマケレレ大学で受けた。

マケレレ大学の名前は昔、大学の前身である技術学校の時に現地語でうるさいという意味のケレレからきているという。22の学部を有し、ロンドン大学の学位に繋がるコースを提供する大学となっている。私は世界中どこでも大学は同じ期間履修すると思っていたが、国によって在学期間が異なることがわかった。日本では基本は四年で、医学部医学科は6年であるが、ウガンダでは学部によって異なるが、3年から5年であり、医学部医学科は5年間であった。また、ウガンダでは法学だけが大学で学ぶことができず、別の教育機関で学ぶことができることにとても驚きを感じた。

ウガンダでは全人口の60%の人々が農業で生計を立てている。地方により特産物が異なり、ムバララではマトケが盛んに生産されているという。ウガンダでは1000mmから1500mmの降水量、火山からの豊かな火山灰、気温から作物の管理を怠っても収穫できることが多く、基本農家はあ



まり畑の管理をしないという。そのせいもあってか水路の整備も遅れており、金銭的に余裕のある家庭しか灌漑農業を行うことができないという。

●NaCRRI

NaCRRI (National Resources Economy institute) は、JICA の専門家がネリカ米の品種改良、品質保持、病害虫の研究、農家への指導を行っている施設であった。ウガンダでは米の需要が都市部を中心に高まってきているという。これは、食生活の変化によるものであるという。もともとウガンダで主流の主食であったマトケは調理に手間と時間がかかり、時短できる米の需要が高まってきている。それに伴い毎年米の需要が 6% ずつ上がってきている。また、保存性が高く、高く売買することができお金の換えやすいことから生産者にも多くのメリットがある。最近では米の需要が高まってきていることから、米不足に陥り、中東のパキスタンから大量に輸入している事実もある。私は米を輸入することはウガンダの経済成長の妨げになると感じている。なぜなら、米の輸入に外貨を使ってしまうことにある。ウガンダを含め、発展途上国ではインフラなどの国の発展に関わることに外貨を使うべきである。またウガンダのような米を生産するポテンシャルのある国では食料の輸入に外貨をなおさら使うべきはなく、そのポテンシャルを引き出し、高めることが有効であると思う。



JICA が普及を進めているネリカ米は味がよいアジアの米と、生産性は低い乾燥に強いアフリカ種を掛け合わせてできた米である。私はネリカ米は一品種しかないと思っていたが、いくつかタイプがあるという。アフリカ種の特徴が強く出ている 1 から 18 番と、日本種の特徴が強く出ている 1 から 60 番に分けられる。その中でもウガンダでは 1 番、4 番、10 番の 3 種類が流通している。そのなかでも 1 ヘクタールあたり、3~5 トンの収量が期待でき、成熟まで 110 日で、いもち病に強い 4 番が主流であるという。また、1 番は成熟性で雨期にも対応し、一ヘクタールあたり 3~4 トンで、いもち病に強い。1 番の一番の特徴は香り米であることである。日本米のように香りがした。最後に 10 番は開花するまで 69 日間と極早熟性であり、一ヘクタールあたり、5 トン以上の収量が期待でき、いもち病にも抵抗があるタイプである。3 タイプのなかであると、極早熟性であり、短期間でより多くの収量を得ることができることから、私は 10 番のネリカ米が一番ウガンダでは有用な品種ではないかと考えた。しかしウガンダの気候では、4 番が一番適しているという。ネリカ 4 は 1 や 10 に比べて根が地中深くまでのび、乾期の水の少ないときも、安

定して水分を吸収することができる。これは実験室の中ではわからないことであり、私は現地に自らの足で訪れ、実験することの大切さを再認識することができた。

またここではネリカ米の普及についてもお話を伺うことができた。ウガンダでは農業技術の普及に多くの課題を抱えていることがわかった。一つ目は農業普及員の数が少ないことである。また、数少ない農業普及員は技術、知識、実践力が不足しているという。さらに農業統計のデータが不足しており、ウガンダの農業の現状を数字から確認することができない。最後は普及員の活動管理、評価システムが不十分であることである。私は国の発展には資金と教育が最も大切であると考えており、この話を聞いて発展途上国の農業を農業教育という角度から支援してみたいと感じた。実際に現地の農家さんを訪問した際も、より高い収入を得る方法、作物を知り、子どもの学費やより効率的に農業を営むための機械や肥料、農薬の購入資金に充てたいとおっしゃっていた。

● Mubarara hospital Clinic master

今回の研修で、現地の病院を訪問することでウガンダの医療事情を知ることができた。一つ目に訪問した病院は Clinic master というシステムを採用している。このシステムは電子カルテのことであり、患者一人一人の症状や過去の病気に加え、体重や身長などの情報がオンライン上で病院内で共有できるシステムのことである。今までは電子カルテではなく、紙のカルテであったため、管理が甘かった。しかし、Clinic master を採用することで、より正確により多くの患者を診察できるようになったという。私はこのシステムでウガンダの医療事情が向上すると感じた。しかし、実際にこのシステムを利用している医者に聞くと、より多くの患者の情報を入力できるようにしたい、他の病院とも患者の情報を共有できるようにしたい、という声が上がった。ウガンダでは医療費を払わず、病院を後にしてしまう人がいるため、先に必要なお金を払う。診察の結果より検査が必要であると感じた場合、また検査の前にお金を支払わなければならない。外来の患者はこのシステムでもよいかもしいないが、緊急を要する患者にとってこのシステムはすごく不便であると感じた。

ムバララの病院では JICA の成田隊員と合流して見学した。この病院は国立の病院であり、クリニックマスターを採用している病院に比べて建物は古く、病床も足りていなかった。成田隊員とこの病院を見学して、見えない利益を現地の人に理解してもらうことの難しさがあることがわかった。成田隊員はムバララ病院で 5S の指導をする方であった。この取り組みを通して、散らかった医薬品やカルテを整理し、患者によりスピーディにかつ高度な医療を提供することにつなげることが目的であった。しかしこの取り組みは直接収入と繋がる農業分野の支援と違い、見えない利益が得られる取り組みであるため、現地の人々はあまり乗り気でなく、理解されないことが多いという。私はいかに支援の取り組みが現地の人々に結うようか丁寧に説明することが大切であると感じた。

7. 最後に

私はこのプログラムに参加してとてもよかったと思う。実際に JICA の活動現場や農家さんや病院を訪れることで、改めて現地に行くこと大切さを再認識することができた。また英語の学習に関するモチベーションが向上したと思う。私はメンバーの中で一番、英語が不得意であり、友達にはできるが、質問したいときに気軽に質問することができない、TA さんとバスやホテルでたわいもない会話ができないなど英語の壁にぶつかった。この経験を元に、英語力の向上により磨きを掛けたいと思う。

私の将来の夢は農業高校の教員である。今回、自分の目や耳で感じたこと見たこと聞いたことを整理し、教壇に立ったときに、この経験を話しより多くの生徒がグローバルな視点を持てるように指導できるようになりたい。最後に蕪木先生、安藤先生、TA さんをはじめとするすべての関係者のみなさまに感謝する。

ウガンダ海外実践教育プログラムに参加して得たもの

医学部保健学科看護学専攻1年

石破 さくら



目次

1. ウガンダ海外実践教育プログラムに参加しようと決めたきっかけ
2. ウガンダに行く前と行った後のイメージ
3. プレゼンテーションの内容
4. プレゼンテーションを通して感じたこと
5. ウガンダに行って学んだこと、得たもの
6. 最後に

1. ウガンダ海外実践教育プログラムに参加しようと決めたきっかけ

私がこのプログラムに参加したいと思い始めたのは高校三年生の受験生の頃である。鳥取大学を受験しようと決めて大学について調べているときにこのプログラムについて知った。その頃はウガンダについてなにも知識がなく、アフリカ大陸にある国ということしか知らなかった。そのため、ウガンダってどんな国だろう、ウガンダの人はなにを食べているのだろう、どんな生活をしているのだろう、といろいろな疑問と興味がうかんだ。そして、ウガンダという国について調べていくにつれ、インターネットの画像などを通して学ぶのではなく実際に自分の目で見て確かめたいと思うようになった。

大学に入学し、ウガンダに行きたいという気持ちは強くなった。海外青年協力隊でアフリカに行っている人のブログや、このプログラムに参加した先輩のコメントをインターネットで調べ、読んでいるうちに絶対にウガンダに行こうと決めた。両親からは、コロナウイルスのことや、アフリカの国は治安が悪そうという理由から行く直前まで反対され続けたが、何度も説得して無事に行くことができた。

2. ウガンダに行く前と行った後のイメージ

ウガンダに行くまでは、前述のとおりウガンダについて何も知識がなかった。インターネットを通して、緑が豊か、食事は毎食マトケとポショ、気温は年中20℃以上など少しの情報は得ることができた。国の文化、生活について調べ、ウガンダに対して持っていたイメージは、「危険そうで貧しい人々があふれている国だけど自然豊かでのんびりできそう」だった。危険そうというの

は、一人で出歩けない、携帯電話や財布をひったくられそうというイメージのことである。またウガンダに行くまでは、ウガンダという国はスラム街のような景色が一面に広がっていると思っていたため、貧しい人々であふれているという印象を持っていた。

しかし、実際に訪れてみると、良い意味でも悪い意味でも全くイメージと異なっている部分が多く見られた。まず、食事のことである。ウガンダに行くまでは、ウガンダに行ったら毎食バナナを食べなければいけない生活になるのかと少し恐れていた。しかし実際は全く違っていた。鶏肉や牛肉、ヤギ肉、ご飯にポテト、サラダやパスタなど日本とあまり変わらない食事を楽しむことができた。もちろん日本食を食べたくなることは何度かあったが、特にフルーツやヤギ肉は本当においしくて感動した。



次に、街中をバスで走って衝撃を受けた。実際に見るまでは、貧しい人々がぼろぼろの服を着てそこら中で作物を売っているというイメージを持っていた。しかし、想像していたものよりはるかにきれいなスーパーマーケットやショッピングモールが立ち並んでいた。スラム街が一面に広がっているわけでもなく、綺麗な服を着ている人が多かった。道路も舗装されていない赤土のぼこぼこの道を想像していたが、日本の道路のようにコンクリートで舗装されている道も少なくなかった。このように想像していたものより良かった点が多くあった。しかし、実際に訪れて気付いた悪い点もいくつかあった。例えば、空気の汚さである。一歩外に出れば排気ガスのにおいがひどく、世界的にも上位にランク付けられるほどの空気の悪さという現状に納得できた。また、露店で売られている食べ物や公衆トイレの衛生面についてはかなりの衝撃とショックを受けた。露店では生肉や生魚が常温で包装されることなく売られている。野菜やフルーツは無造作に重ねられ、傷んでいる。このような不衛生で危険な場所から、人々が食料を買っている、買わざるを得ない、という状況にショックを受けた。しかし露店以上に衝撃を受けたのが公衆トイレである。あまりの汚さと管理が行き届いていない現状に驚いた。トイレトーパーが備え付けられていないのが普通であるし、水が流れないことも珍しくない。トイレを利用したくないという気持ちから、ウガンダで生活している間はトイレを我慢することが多かった。ウガンダにおいて膀胱炎の患者が多いという現状を現地の病院を訪問した際に聞いたが、これらのことからなぜ多いのかということが理解できた。露店、公衆トイレの衛生面にかんしては今後改善していくべき大きな課題であると考えた。





3. プレゼンテーションの内容

私はウガンダの食品衛生についてプレゼンテーションを行った。

ウガンダでは、食べ物や飲み物により引き起こされるウイルス性肝炎や食中毒が日常的に起こり、問題視されている。では、なぜこれらの病気が日常的に引き起こされるのだろうか。この答えが、衛生状況の悪さである。プレゼンテーションでは、特に露店の衛生環境について注目して発表した。

私がこのテーマを選んだ理由は、さきほど述べた通り、ウガンダにきて食品の衛生状態の悪さにショックを受けたからである。特に路上で売られている食べ物は、食べなれている現地の方でも腹痛や下痢を引き起こすほどの状態の悪さだと聞いた。ではなぜ、このような衛生管理が行き届いていない場所で人々は食品を買うのだろうか。現地の方の話によると、このような場所、つまり露店で買い物をするのはお金がない貧しい人々で、スーパーマーケットに行くことができないからだそうだ。露店はスーパーマーケットのように包装や冷蔵保存にお金をかけていないぶん販売価格が安い。お金がない貧しい人々にとっては安く食品を買うことができる露店は日々の生活に欠かせない場所になっているのだ。そのため、衛生環境が悪いからといって露店を禁止するということはできない。だからこそ私は、露店をなくすのではなく衛生環境を改善していく方法の提案をプレゼンテーションで行った。



これらの写真はウガンダの露店の様子である。肉や魚が生の状態ですぐに路上で売られている。当然、肉や魚に虫が触れないようにこれらがショーケースに入れられて売られているというわけでもない。虫はたかり放題であるし、そばでは車やボダボダ（ウガンダのバイクタクシー）が走っているため土埃が舞っている。また、販売者が日本のようにマスクをしていたり、髪の毛が落ちないように帽子をかぶっているということもない。だから販売者がなんらかの感染症になっていけば、おそらく売っている食べ物にウイルスが付着し、感染を広げてしまうという危険性も否定できなくなる。発展途上のウガンダの医療状況においてこのような事態が起これば、集団感染を阻止することはほぼ不可能となる。今世界中で恐れられているコロナウイルスのように、ウガンダ中に感染症が広がってしまうかもしれない。

このような事態に陥らないために食品の衛生状態の改善方法を4つ提案する。一つ目はショー

ケースのような入れ物に野菜や肉、魚などを入れて売ることだ。もちろん日本のようなガラス張りの冷蔵機能があるものを指しているのではない。ウガンダの安く売ることの特化した露店において日本のような高機能なショーケースを導入することは不可能であるからだ。しかしガラスでできていなくても冷蔵機能がなくても、入れ物に食品を入れて売るとは虫から食品を守ったり、野菜やフルーツが傷んだりすることを防ぐことができる。

二つ目は生魚や生肉をラップやプラスチックトレイ、ビニール袋などを使い、個包装にすることである。ウガンダの露店では、一般的に肉や魚は日本のように小さく切ったり加工などしたりせずに、そのままの形で売られている。肉にかんしては、客が買いたい量の肉をその場で切って売るそうだ。当然買われるまでの間生肉は外気温にさらされた状態で、包装などもなく店頭でぶら下げられている。これは肉の腐敗を進行させ、人々がこの肉を食べた際に食中毒を引き起こす危険性がある。そこで、ラップやプラスチックトレイを使い魚や肉を個包装にすることが重要だと考えた。個包装にすることで虫や土埃などから食品を守るだけではなく、人間の手が直接食品に触れる回数を減らすことができる。今の肉の売り方では客が肉を買うたびに切るという行為が必要なため、食品に直接手が触れる回数が増えてしまうからだ。初めから肉を小分けに切って袋などに入れておけば、直接手が触れる回数は一回に抑えることができると考えた。

三つ目はほうきや塵取りを使い、店を綺麗にすることだ。これはごく普通のことであるが、実際に街中をバスで通ると掃除が行き届いていない露店が多く見られた。おそらくウガンダの人々にとっては、毎日掃除をするという習慣が浸透していないのだろうと考えた。では、なぜそのような習慣がないのだろうか。以前、日本で出会った外国人に、日本の小学校や中学校、高等学校で掃除時間というものがあることに驚いたと言われたことがあった。この外国人によると、学校の掃除を毎日生徒がするなんて考えられない、こんなことをするのは日本だけで外国では考えられないそうだ。私たち日本人には毎日掃除をするという習慣が幼いころから身につけていたが外国人にとって、これは当たり前のことではないのかもしれない。だからこそ、私たちにとっては基本的なことかもしれない、ほうきと塵取りを使って毎日掃除をするということを現地の方々が習慣化していく必要があると考えた。

最後に、常温での販売を避けるため氷を使うことを提案する。しかし今のウガンダでは冷蔵庫や冷凍庫を持っている家庭はごくわずかに限られている。そのためこの提案の実現は厳しいのが現状である。そこで私は、ウガンダに氷を作る専門の企業がないかを調べた。すると氷を作りそれをスーパーマーケットや店におろす、食品のパッケージング専門の会社があることが分かった。まだ今の段階では露店のような小さな店と取引をすることはないようだったが、今後このような会社が増え氷などの保冷材が普及していけば、ウガンダにおける食品の衛生状態への課題は大幅に改善していきだろうと考えた。



これら4つが、私が提案した改善策である。一つ目、二つ目、四つ目に関してはお金がかかる改善策であるため、すぐに露店に取り入れることは不可能かもしれない。しかし三つ目の、掃除をするという策は誰もがお金をかけずに実行できる方法である。まずはお金を必要としない方法で衛生環境の改善を図ることが重要であると考えた。私がこのプレゼンテーションを通して最も

伝えたかったことは、現地の方自身が衛生環境を改善しようという意識をもって少しずつ行動に移していくことが大切であるということだ。今後ウガンダの食品の衛生状態が改善していき、食中毒やウイルス性肝炎により命を落とす人々が減ることを願っている。

以上が私のプレゼンテーションの内容である。

4. プレゼンテーションを通して感じたこと

プレゼンテーションを通して、ウガンダの衛生環境や医療状況について学ぶことができた。ウガンダでは農業や交通などの分野では開発が進んでいるが衛生面や医療面での改善や開発はまだ十分に進んでいないと感じた。衛生面の改善が進んでいないのは、おそらくウガンダの人々の綺麗にしようという意識が低いからであると考えた。私たち日本人からみればウガンダの環境は日本よりもはるかに衛生状態が悪く汚いと感じてしまうが、ウガンダでしか暮らしたことがない人々にとってはそれが普通であり汚いということに気が付かないのだろう。このことから国際協力がいかに重要なことであるかということに気が付くことができた。国際協力があることで、ウガンダのなかの人だけでは気が付かなかった現状、課題に、外国から来た人の指摘により気が付くことができるからだ。だからこそ衛生、医療面での国際協力はウガンダという国にとって不可欠なものである。私たちのような外国人がウガンダに行き、今のウガンダにはどのような課題がありどのようにして解決していけば良いのかということ伝える必要がある。農業分野のように衛生面での国際協力が充実し、ウガンダの人々が今の状況に危機感をもって、改善しようと行動に移してくれることを願っている。

5. ウガンダに行って学んだこと、得たもの

ウガンダでは今まで経験したことがないような素晴らしいことをたくさん経験することができた。毎日が刺激だらけで一日の終わりには疲労でなにもせずに寝てしまう毎日だった。ウガンダ生活のなかで最も印象に残ったのはカルチャーセンターに行き、ウガンダの伝統ダンスを見たときである。このときが一番、ウガンダにいることを実感できた瞬間だったからだ。ダンスを見ている時間はもちろん楽しくて感動したが、そのあとに観客全員でダンスをしたときはこれがアフリカのノリか、とアフリカ人の気分を味わうことができた気がした。この経験で私は今まで見たことがない自分を見ることができた。今までの日本にいる生活の中では、周囲の楽しい雰囲気に乗って自分も一緒に楽しむということが得意ではなかった。もちろんカルチャーセンターで踊った時のように人前でダンスをすることも苦手だった。しかし、ウガンダでは、どこにいても音楽がかかればみんながリズムをとって踊りだし、歌いだす。初めは、こんなテンションにはついていけないと感じていたが、約三週間ウガンダで生活し、みんなで楽しむことの楽しさを知ることができた。

次に印象に残っていることは、ムバララ病院を訪問したときのことである。私は鳥取大学で看護学を専攻しているため、この日を一番楽しみにしていた。ムバララ病院では、協力隊員としてムバララ病院で働いておられる日本人の看護師の方と病院見学をした。この病院を訪問するまでは、一つの大きな建物（日本でいう体育館のような建物）に様々な科がごちゃごちゃに混ざって診察を行っているのだろうというイメージを持っていた。しかし実際に行ってみると、婦人科、産科、外科、小児科などきちんと建物が分けられており、想像以上に日本の大学病院などと変わらない様子だった。また、患者や家族もきちんと診察の順番を守り待合室で番号札を持って自分の番を待っていた。このように想像していたアフリカの病院とははるかに違う光景を見ることができた。しかし悪い点も当然あった。例えば、患者の家族が病院の敷地内に溢れており、いたるところで食事や昼寝をしていたことだ。この国で日本と違うのは、患者の家族が全員で患者の見舞いや世話をしに来ることだ。そのため病院の外には家族や親戚が地面にレジャーシートのようなものを敷き、そこら中で寝ている様子が見られた。ウガンダの人々が家族や親戚をとっても大切にしていることがわかったが、やはり衛生面などからみるとあまり良い光景ではないと感じた。

ほかにも手洗いや手指消毒が病院内であるにもかかわらず浸透していないと分かった。病院見学ではこのように課題がたくさん見つかった。同時に、なにか自分にできることはないのだろうかと考えるようになった。建物を立て直す、病床数を増やすなど大きなことはできないが、正しい手洗いの仕方を伝えたり、病院内の床や窓掃除の大切さを教え一緒に掃除をしたりといった小さなことであればできる。ウガンダを訪れるまではあまり国際協力に興味がなく、将来どこかの国に協力隊員として派遣されたいということも考えていなかった。しかし今回ムバララ病院を訪問して、現地の現状を知り自分もウガンダの発展に貢献することができるかもしれないと考えるようになった。見学の案内をしてくださった看護師の方が、長い人生のうちのたったの1~2年協力隊員として海外で働いてみるのもいいなと思ったと言われていた言葉がとても印象に残っている。この言葉を聞き、自分もいつかアフリカに戻ってこの方のように誰かの力になりたいと思った。この病院訪問が、私が国際協力に興味を持つことができたきっかけになった。

また、私はこのプログラムを通してコミュニケーション能力を向上させることができた。自己紹介をしたり、人前で自分の意見を言うことが得意ではなかったが、自分から進んで質問したり会話に入ろうとしなければ知りたいことをなにも学ぶことができない環境に身を置いていたため、苦手だったが必死に英文を考え会話を成り立たせようと努力していた。さらに、今までできなかったプレゼンテーションを初めて経験し、自分に自信を持つことにつながられた。ウガンダにいた三週間は、なかなか言いたいことが伝わらないもどかしさや、相手が言っていることを聞き取れず理解できない申し訳なさを毎日感じながら過ごしていた。コミュニケーションをとるのは思いのほか難しく苦戦したが、どのように言えば伝わるのだろう、簡単な英単語で言い換えられないかなど常に頭の中で考えながら会話をし、自分の意見を相手に伝えることができた時は本当に感動した。今では、英語で会話することを恐れていた初めの約一週間が懐かしく感じる。もちろん自分の英語力に自信がついたというわけではないが、人前で話すこと、英語で話すことへの恐れがなくなった。しかし、会話をする事への恐れがなくなったと同時に、自分の英語力の低さにショックを受けた。日本で英語を習い始めた中学生のころから、苦手科目を聞かれるたびに「英語です」と答えてきたほど英語が苦手だった。中学生、高校生のころは英語から逃げ続け、あまり勉強をしてこなかった。おかげで今回のプログラム中も、全く何を言っているのか聞き取れないことや、急な質問に答えられないことが何度もあり、悔しい思いをたくさん経験した。どうして今まで英語から逃げてきたのだろう、もっと勉強していればよかったと何度も後悔し、帰国したらすぐに勉強に取り掛かろうと考えていた。日本に帰国した今、レポートなどしなければいけないことに追われまだ実行できていないが、ウガンダで味わったこの悔しさを思い出し必ず行動に移していきたいと思っている。このプログラムに参加するまで、英語なんてと言って逃げ続けてきた私が、もっと英語を話せるようになりたい勉強しようと思うことができたのは、ウガンダで出会ったTAの方々や滞在先で仲良くなったホテルの方、訪問したケネディセカンダリースクールの子供たち等々、本当にたくさんの方々とかかわり、コミュニケーションをとることができたからであると思う。

6. 最後に

ウガンダに行き学んだこと、得たものはこれらのほかにもたくさんあった。一生に一度の大学一年生の春休み、このプログラムに参加しウガンダで過ごすことができ本当に良かったと思っている。今まで知らなかった自分を知ることができ、ウガンダの医療の発展に貢献するためにまたアフリカに戻りたいという新たな夢も持つことができた。そのために、もっと英語を勉強し英語力を向上させ、自分の意見を自分の力で現地の方々に伝えられるようになりたい。

また、今回見てきたウガンダの姿、魅力を日本の家族、友人にしっかりと伝えウガンダという日本人にとって未知な国をもっと多くの人に知ってもらいたい。私が看護師になりウガンダに協力隊員として貢献し恩返しできる日はおそらくまだまだ先になるだろうが、今回目に焼き付けてきた光景はすぐにでも日本人に伝えることができるからだ。これがウガンダへの恩返しになるか

はわからないが、実際に行って感じたこと、良いところ悪いところなど実際に行って見た者にしかわからないことを伝えていきたい。そして、一人でも多くの方がウガンダという国に興味を持ち、行ってみたいと思ってくれる人が増えればと思っている。

このプログラムは大学の先生方、現地の方々等々多くの方のサポートで無事に終了させることができた。コロナウイルスの大流行という現状の中で最後までスケジュール通りに終了させ無事に帰国できたということは奇跡である。今までにない貴重な経験をし、充実した三週間を過ごせたということに感謝をして、この経験をこれからの学びに生かしていきたい。看護師になるという夢に加え、国際協力という新たな夢に向かって、今後さらに努力を続けていきたい。



最後まで読んでいただきありがとうございました。